



■主な内容

- 第48回海外交流の会報告
- 「韓国文化への扉 안녕하세요! (アンニョンハセヨ)」
- 特集: 森林と建築
- 新木場木材会館探訪記
- 天竜の森見学記
- 木と暮らし: 半乾燥地域の農村で
- 魅力的なりノベーション
- ASWA 組 活動報告
- 会員の本「北のランドスケープ」
- 災害復興見守りチーム



韓国文化院屋上に再現された  
伝統家屋 (撮影: 井出)

第48回海外交流の会報告

48<sup>th</sup> International Lecture : Invitation to Korean Culture  
「韓国文化への扉 안녕하세요! (アンニョンハセヨ)」

小池 和子 KOIKE Kazuko

2010年UIFA韓国大会に向け、11月28日(土)に「韓国を知る」講演会の第2弾が韓国文化院で開催された。

今回は食事を挟み、午前に韓国文化院の見学、午後は駐日大韓民国大使館韓国文化院図書映像資料室長原田美佳氏による講演会であった。見学や食事会、講演をとおして、韓国の文化や生活(衣・食・住)について一歩理解が深まった。



原田美佳講師 (撮影: 古村)

■午前部: 韓国文化院の見学と食事会 午前11時~

図書映像資料室をかわきりに、ギャラリーMI、伝統家屋と伝統様式の屋上庭園「ハナル庭園」、多目的ホール、テコンドー教室を原田氏に案内していただいた。ギャラリーMIでは韓国伝統工芸と絵画の「粋」展が開催されており青磁器や辰砂、玉、ボジャギ、伝統刺繍、伝統民画が展示され、象嵌入りの青磁器や精緻な刺繍の指貫にしばし見とれた。作家の説明もありとてもよかった。

伝統家屋は「昌徳宮の演熙堂」をイメージして造られ、主人の部屋(サランバン)、板の間(テジョンマル)などと庭(マダン)と儒教の精神が反映された構成だ。床、梁、天井に松材を使用し、部戸のように吊り上げる建具、壁に牡版紙を張ったオンドルのある室等を特別に体験させていただいた。板の間は、幅の異なる短材を使った朝鮮張りの床で、富井先生の会で紹介された伝

統的建物の板床の実物が見られ、ようやく板の間のスケールを把握することができた。

■午後部: 「韓国文化の扉 안녕하세요! (アンニョンハセヨ)」

「アンニョンハセヨ(안녕하세요!)」=「安寧でいらっしゃいますか」の挨拶後に氏名、年齢、出身地を確かめること。ハングル文字は母音10と子音14からなること。名前はフルネームで呼び「金・李・朴・崔・鄭」が5大姓であること。名前は行列(トルリムチャ)という付け方で一族の位置関係がわかり、年上の人には絶対敬語を使うこと。味や色み、調理方法が「五味・五色・五法」で表される韓食、冬は金属、夏は陶磁器の食器で、箸の他にスプーンを使うこと。チマ・チヨゴリの着方と、歩き方が裾を踏まないように蹴るように歩くこと。伝統韓屋の空間構成など韓様式の衣食住の基本的視点について知ることができた。儒教の影響で族譜(家系図)や伝統韓屋に見られるように男性社会であるが、内実が女性、特に祖母の影響が強いという話や、核家族化や女性の急速な社会進出、出生率の低下、物価高等、課題も見える奥の深いお話に興味は尽きなかった。



軒瓦の影を映す韓国障子 (日本とは逆に紙が室内側) (撮影: 井出)

第49回海外交流の会のお知らせ 49th International Exchange Lecture  
パネルディスカッション: 「韓国の現代文化—若者に聞く—」

日時: 2010年3月6日(土) 14:00~16:30  
会場: 成城大学 8号館8階832号室  
(小田急線 成城学園前駅下車北口より徒歩5分)  
会費: 会員1500円、非会員2000円、学生500円

第16回世界大会(韓国大会)のお知らせ Overview of the 16th Congress in Seoul

会員の方には、すでに事務局から韓国大会の第1サーキュラーが届いていると思います。参加希望の方は、大会事務局、及びUIFA JAPON事務局に早急にFAXをお送りください。

時間	10/4(月)	10/5(火)	10/6(水)	10/7(木)	10/8(金)	10/9(金)-10/12(火)
午前		受付	受付	受付	終日旅行	ポスト カンファレンス ツアー
		開会式、基調講演	セッション3	セッション5		
		セッション1	コーヒーブレイク	コーヒーブレイク		
		セッション2	セッション4	セッション6		
午後	受付開始 (海外参加者)	昼食	昼食	昼食	昼食	
		休憩	休憩	休憩	休憩	
		視察旅行	視察旅行	視察旅行	視察旅行	
		歓迎式典	歓迎会	晩餐会	お別れ晩餐会	
終日		展示会				

**特集趣旨 Notes：**2010年10月開催のソウル会議のテーマ「Green Environment」に因み、日本古来の建築素材である木材と、それを供給してきた森林に焦点を当てた。

政府も緊急経済対策の中で環境の項に森林・林業再生の加速をあげている。日本は国土の66%が森林で占められている国でありながら、手入れが行き届かず荒廃した森が環境問題のみならず社会問題化している。

81号では木造校舎のリノベーション事例を取り上げたが、都市では防災面からもコスト面からも木造建築の需要は低い。木材を新技術で多用した江東区新木場の木材会館は、新しい試みである。一方森林の一事例としては、地元NPOが森林の保護活動をしている天童の森を取り上げた。日本の森林と建築の現状の一端を把握できたと考えている。

そして海外事例として、少ない樹木を大切に使うケニア・ムインギ東県の状況を取り上げた。

(須永 淑子 SUNAGA Yoshiko)

1888 (M21) 年、金原明善植林の  
スギ99%、ヒノキ1%の人工林



## 新木場木材会館探訪記 Report: Timber Industries Hall

寺尾 信子 TERAO Nobuko



木材会館西側外観。杉板型枠のコンクリート打放と桧のテラス  
(撮影：中野)

※内外装に使用された木材：  
ヒノキ、スギ、タモ、ナラ、カシ、ブナ、カエデ、クルミ、山桜

新年早々の1月12日、UIFA広報部会に同行し、話題の木材会館を訪問させて頂いた。東京木材間屋協同組合理事長 吉条(きちじょう)良明氏にご案内いただいた。

### 美しく温もりのあるオフィスビル

新木場駅の正面から少し右手に回ると、テラスの奥行まで無垢材をふんだんに使用している特徴的なファサードが目飛び込んでくる。内外、合わせると1000㎡の木材が使われたとのこと。玄関に入ると、木を十分に使用したオブジェに迎えられ、美術館のようなイメージもあった。国産材の需要拡大を目指す拠点を、美しいビル建築として昇華させ、環境共生時代の都心のオフィスビルのプロトタイプとして、最先端の提案をしようとする設計コンセプトが感じられた。低温蒸気乾燥により含水率を15%までに抑えた岩手県遠野産のヒノキ材はじめ、上質の国産材を大量に用いている贅沢な建築と言える。この建築の魅力は、木材が無機質なオフィス街に新しい可能性を与えてくれたこと、そして何よりも、中で働く人々を包み込む優しい木を室内の随所に使い、オフィスの上質な快適空間を実現していることにある。

私たちが創る住宅の小空間でも、大規模オフィスビルでも、ひとを包む空間の質は同じように気持ちのよい優しいものであって欲しい。木をふんだんに使うことで、あきらめていたオフィスビルでもこれが実現できることに明るい希望を感じた。

### 木材を使うための技術と法整備を欧州に見る

この10年あまり、ドイツ・スイス・オーストリアなどでは、木造の新技術がどんどん普及している。欧州の法整備や木造技術の進化は著しい。建築の製造



オーストリアの、接着剤を使用しないダボによる積層木造パネル。オーダーで17~38cm厚のパネルが制作されている (Thoma社)



避難安全検証法により、高天井の煙だまりを設け煙降下時間を確保して内装制限を緩和した木質のオフィス空間 (撮影：井出)

から廃棄にいたるライフサイクルにわたってのCO<sub>2</sub>排出量の削減に、「木」の役割を抜きに考えることはできないことを、誰もが気がついているためである。木質大型パネルが中高層の建築に使われる例は、珍しくなくなった。スイスの市街地で、6階建ての木造大型パネルによるマンションを見学した。またオーストリアでは厚さ36cmの、接着剤を用いないダボによる積層木材パネルを床・壁・天井に使い込む住宅工法の見学をしたことがある(写真)。

輸送エネルギーの小さい「地域産材」を適切に消費し、適切に森を育て、ミニマムエネルギーで建物を運用して「生涯CO<sub>2</sub>排出量(LCCO<sub>2</sub>)」の小さい、しかも快適である、そのような特長をもつ「木の建築」がクローズアップされている。

ゆっくりではあるが、世界における木の需要は今後大きく変わってゆくはずである。法規制が高いハードルとなっていた日本においても、法体系に性能規定化が導入され、避難安全検証法や、耐火設計法により、木材会館のような「木の建築」への道が開けてきており、建築界に変革がもたらされるものと考えられる。



吉条理事長 (撮影：松川 淳子)

### “ふつうの木”を内外に使う

「海外の雑誌を含め、これほど、いちどきに建築雑誌の表紙を飾った建築は、日建設計の作品でも例がないそうです」ということも吉条氏は言われていた。建築の完成度の高さに加えて、地球温暖化対策という喫緊の課題に答えようとしている建築であることもその一因であると考えている。世界中が今、「木の需要拡大による森の再生」および「LCCO<sub>2</sub>の小さい木の建築の推進」に大きな関心を寄せ、正面から取り組もうとしているからこそ、海外からもこの作品に高い評価が与えられていると考える。

近代的なビルでありながら、「追掛大栓継手」による接着剤を用いない日本の伝統技術を用いて24mスパンのボックス梁を構成するといった手法は、欧米からみても敬服される技術である。7階のホールでさえも、市場流通材の120角正角材のみで大空間の梁が組まれている。また、階の途中のファイヤーストップ材は別として、全体として不燃処理をしていない木の使い方も見逃せない。

木材間屋協同組合という100年の歴史をもつ組織のトップの方が、今まさに新たな100年の入り口で、時代の最先端の意識を持って堂々と立ち向かっておられる印象を感慨深く拝見した。そしてまた、日本の木の使い方を、世界に誇れる手法で考えることの意義を感じる貴重な見学であった。

## 天竜の森見学記 The of Forest of Tenryu

桑原 学子 KUWAHARA Takako

「木場のまち」江東区では、道を歩いていると「天竜木材」の看板を見かけることがある。良質の住宅材で優良ブランドという印象がある天竜木材だが、その産地を12月初旬、浜松市の森林組合や仙人の会の人達の案内でUIFAの須永さんたちと見学した。

### 天竜の杉

樹齢1300年以上と伝えられる春塾杉を訪れた。期待を超えるすばらしい樹で、苔むした太い幹、空に広く枝を伸ばし、神々しいまでの姿である。長寿でも百歳の人間に比べると果てしなく長く生き、その存在のみで価値があり感動的だ。金原明善が植林した杉が学術参考保護林として管理されている現場にも行った。よく手入れされた植林の見本で、垂直に伸びた立派な杉林は見事な景観を構成していた。金原明善の林へは山肌の狭い道を延々と車で登る。道中、傾斜地に石垣を積んだ茶畑がある集落をいくつも通過したが、手間と年月をかけて作られた段々茶畑は造形としても面白い景観であった。

### 木を使った天竜の建物

宿泊した松本屋は、林業で栄えた春野のシンボリックな旅館だ。庄屋の家を移築したもので材木を贅沢に使った明治期の建物が大切に使われている。歴史を語る旅館の古い看板ももちろん木だ。古くから火伏せ神として信仰を集める秋葉神社にも参拝した。新築の白木の門には木彫りの彫刻が施され豪華な装いだ。天竜杉などの木が随所に使われている秋野不矩美術館は印象深く面白い。館に通じる坂道には木の電柱が並び、夕暮れ時、裸電球に明かりが灯ると素朴な温かさが周囲に広がり、ほのぼのとした気分になる。

### 天竜の森の問題

木の幸に恵まれた天竜だが、現在、問題に直面している。消費地の都市では、耐久性や防火性、経済性を重視すると木造住宅は選外になるし、安価な外材の攻勢が続く。環境問題でなぜか割り箸が槍玉にあがってしまうなど、林業は向かい風続きだ。その結果、何十年も前に将来必要と考えて植林した木なのに、使い途がないため間伐もせずに放置される森林が増え、併せて鹿や熊、カモシカによる食害も広がり、美林が育たず荒れた景観が出現している。日本の林業全体の立て直しを図るのは国策の問題だが、個人として、手触りのやさしい自然からの贈り物である木を使う場面をもっと増やせないかと思う。木の文化の基本は、伊勢神宮の遷宮に代表されるように、ある年月が経過すると作り替えるリニューアル文化、朽ちたり燃えたりして再生する再生文化だと思う。



静岡県指定文化財春塾杉。樹高43m、枝張り31mとある  
(撮影：須永)

育てて使う木の文化を現代風にブレイクさせたい。江戸では大火のたびに材木商が大儲けしたように、都市が燃えて再建することで林業が栄えたこともあっただろうが、今や防火や消火の技術も進み、燃え広がらない都市になった日本。緑の美しい日本列島の景観を守るためにも、健全な林業の振興のためにも皆で知恵を出していきたいものだ。

(NPO法人江東区の水辺に親しむ会会員)



木陰はとても過ごしやすい

## ケニア報告 1 Kenya Report 1

### 木と暮らし：半乾燥地域の農村で

#### Life Amid Trees : Villages in the Semi-arid Region

古村 伸子 KOMURA Nobuko

### ナイロビからバスに乗って

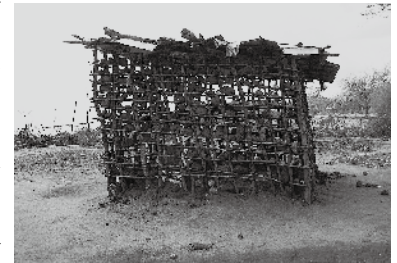
ナイロビには、大きなバスターミナルがある。観光客はあまり足を踏み入れないが、とても多くのケニア人でいつもにぎわっている。まちのあちこちでジャカランタの紫の花が美しい10月初めの朝、ターミナルの屋台でおいしい山羊肉入りピラフで昼食をすませ、ムインギに向かうバスに乗った。バスの屋根には数十キロの玉ねぎの袋や大きな家具が積み上げられている。野菜や雑貨品、その他ありとあらゆる生活物資を地面に並べて売っているマーケットの横を通り過ぎ、満席のバスはスピードを上げた。

私は、CanDo（キャンドウ：特定非営利活動法人アフリカ地域開発市民の会）と将来の協働プロジェクトの可能性を検討するため、ケニアを訪問した。CanDoは1998年からケニアで参加型の開発協力の活動を行っている。活動の主体は住民で、住民自身が考える「豊かさ」を住民の行動によって達成することを目指し、CanDoのスタッフは外部者の立場を忘れずに活動することを心

かけている。プロジェクトの現場はムインギ東県である。人々はカンバ語を話し、半乾燥地域で雨量は農耕のためにはギリギリの量しかなく、干ばつの被害を受け土地がやせている。

### 木陰はコミュニティスペース

村の暮らしでは、木が大事な役割を担っている。赤道直下の日差しは非常に強く晴天の日が多い。木陰がとても過ごしやすく、カンバ語で「ウィムセオ？（ご機嫌いかが？）」「ネーサ（元気だよ）」と声をかけあって、なにかにつけて木陰に人々が集まる。ここは大事なコミュニティスペースである。私が訪れた小学校では、子どもたちが木陰でおいしそうにメイズ（白トウモロコシ）の給食を食べていた。木の下側はだれかが水平に刈り取ったようにきれいにそろっている。山羊や羊が首をのぼして届く範囲を食べつくしたからだ。木の役割は他にもいろいろある。木の内側をくりぬいた養蜂用の巣箱はとてもユニークな形をしている。村の住まいはこじんまりしていて、木と石と土の壁の上に草を葺いて建てる。木で十字に組んだ間に石を入れ、土で塗り固めて外壁となる。小学校の教室はブロック造の外壁、屋根は木材の小屋組みにトタン葺きである。建設協力では保護者が資材を集め、CanDoがセメントや技術を提供する。協力が終了した後も持続可能な仕組みだ。



村の住まいは、まず木を十字に組んだ間に石を入れる。この後土を塗り固めて外壁となる

### 洗面器一杯の水

山道を往復5時間歩いて村に行き、有機農業のワークショップを終えた日、ロッジに泊まる。洗面器一杯の塩からい水で顔を洗って体を拭き、最後に洗濯をする。照明は灯油ランプで部屋の片隅がほのかに明るい。レストランでは焼きたてのチャパティと山羊肉のスープがすこぶる旨い。豪華な星空を眺め、人々の明日を思い、乾杯した。

注）チャパティ：小麦粉を水で練って焼いたもの

UIFA JAPON 事務局  
 〒 102-0083  
 東京都千代田区麹町 2-5-4  
 第2 押田ビル ㈱生活構造研究所内  
 Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866  
 E-mail: uifa@LIQL.CO.JP  
 発行 2010年2月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON  
 c/o LABORATORY FOR INNOVATORS  
 OF QUANTITY OF LIFE  
 DAINI-OSHIDA BLDG.  
 2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU  
 TOKYO, JAPAN 〒102-0083  
 PHONE :+81-3-5275-7861  
 FAX :+81-3-5275-7866

■ 魅力的なリノベーション No.9 Attractive Renovations N.9

自分でさわられる庭へーS 邸屋上庭園 Rooftop Garden  
 飯田とわ IIDA Towa

リノベーションは建物だけでなく、庭にも必要になる。  
 都心のマンション7階建と5階建の建物2棟が廊下でつながり、5階建の建物の屋上が6階に住むオーナー夫妻のプライベートガーデンとなっている。植物の生育環境に適していたためか、10年以上が経過すると高木が育ち過ぎ素人には手入れが難しい状態になっていた。花が好きなお主人はあいたスペースにバラやアヤメを植え、買い込んだ鉢がそこそこに置かれていた。設計のテーマは「自分でさわられる庭」にする事。元々の素材を活かしながら空間を整理し、好きな花を植えるスペースをしっかりとつくれた。また芝も手入れのしやすいように、直線的なデザインにした。庭を眺めるスペースも用意した。バラを誘引したゲートは、ご主人のお気に入り、伺うたびに今年もよく花をつけたと写真を見せてくださる。もう一方の屋上は、枕木で枠をつくりキッチンガーデンに。今年もブルーベリーが実をつけるのを楽しみに待っている。



5月は色とりどりのバラが咲き競う

■ ASWA 組 活動報告 ASWA Team Activities

「モザイクミラー」完成：横浜市奈良中学校  
 美術部長、鈴木初音 (中2)

ASWA 組の方達と、参加した20名の部員が力を合わせて、どんなトイレアートができるか、とワクワクしていました。グループごとに「森と泉」などのテーマで思い思いに作ったので、意見をまとめたイメージを統一するのが難しかったです。学校の仲間が、タイルを触ったり、次々と鏡をのぞいたりして興味を持ってくれました。「この模様が好き!」「鏡が付いて良かった!」などの声がもたらされたのがとてもうれしかったです。



3階2年生用の「森と泉」。他に、天の河を表した「宇宙」4階、「陽だまり」2階が完成 (撮影: 岩崎 恵子)

■ 会員の本 Member's Publication

「北のランドスケープ—保全と創造」

浅川 昭一郎 著  
 共同執筆: 中井 和子  
 出版: 株式会社環境コミュニケーションズ

「街並み景観形成におけるデザインの公共性と私有性」「魅力ある農地・農村景観を考える」の2節を中井が担当している。

中井は「人間の生活・生産の営みと地域固有の自然生態系の営みが、無理なく共生している『風土のデザイン』に遭遇したとき、人々はゆるぎない感動を覚える」また「風景は文化的アイデンティティ」と位置づけ、独自の歴史的発展を「北海道らしさ」という。執筆19人は、都市、農業、自然などの多様な論点から豊かなランドスケープ形成を希求する。美唄や栗山町の訪問時の余韻が冷めぬままに、この学術書を読み、さらに深く北海道に感動。同時に、この本は、世界共通のランドスケープ論として好著である。要必読。

渡邊 喜代美 WATANABE Kiyomi



■ 災害復興見守りチーム Disaster Support Team

「2010年法末復興祈念はつがま茶会」は大雪の中で開催

宮本 伸子 MIYAMOTO Nobuko

1月10日に、豪雪地帯らしい法末において「はつがま茶会」を開催しました。集落のお茶会も定着した感じで、「さいの神」(どんど焼き)がひとしきり燃えた後、会場のやまびこ食堂では、みなさま楽しそうにおしゃべりと、新春のお菓子と、お茶は「おかわり」という和やかな茶席となりました。

2月20日に「いつまでも住み続ける法末を目指して—法末の家屋—」を開催します。今後計画中のオープンガーデン関係のイベントへの参加協力もお待ちしております。



さいの神で恒例の天神囃をうたう長老 (撮影: 安武 敦子)

UIA2011 東京大会 について The 24th World Congress of Architecture, "UIA2011 TOKYO"

2011年9月25日~10月1日、東京国際フォーラム、国立代々木競技場他において、第24回世界建築会議 -UIA 2011 東京大会が東京で開催されます。UIA 2011 東京大会のメインテーマは「Design 2050」。UIA大会が日本で開かれるのは今回が初めてです。「環境」「情報」「生命」の3つのサブテーマを軸に、2050年そしてその先の将来像を描き出し、持続可能な未来に向けて世界の建築家が共有すべき新しいパラダイムについて語り合います。詳しくは、URL: <http://www.uia2011tokyo.com/ja/> をご覧ください。

(三上 紀子 MIKAMI Noriko)

■ 役員会報告

第7回11月17日 (2009年) 総務報告。IAWAへの参加報告。会報82号企画報告。第48、49回海外交流の会準備状況報告。ASWA組より3校でトイレのアート化実施決定。災害復興見守りチームより壁塗りWS、オープンガーデンの報告。IAWAの25周年巡回展覧会準備状況報告。  
 第8回12月11日 (2009年) 第48回海外交流の会総括。会報83号企画報告。パンフレット委員会、ホームページ準備会の進捗報告。災害復興見守りチームの活動報告。IAWA25周年展覧会の総会時に合わせた開催を決定。財務中間報告が審議された承された。  
 第9回1月22日 (2010年) 韓国大会参加申込み状況報告。会報82号作業状況報告。83、84号は英文併記の合併号に。災害復興見守りチーム、ASWA組活動報告。パンフレット委員会進捗報告。第49回海外交流の会準備状況報告。

■ 編集後記

木・林・森と都市を結ぶ川の脅威と親水! さあ親森林木で減災! しよう(渡邊) 2月の東京の雪は春の準備、豪雪地方の皆さんのご健康をお祈りします (古村) S邸に近い復興小学校再生「四谷ひろば」を愛で、明石小を想う (在塚) 生きていく木材、伸縮自在が面白い。無節、無垢よりも私たちの山から (中野) 新築共同住宅から、正角材が消えて久しい。この事実には怯えを感じる (井出) 天上に向かいすくと伸びる杉を見ると次世代に引き継ぐ壮大な時間を思う (須永) 自分が関わった事例を紹介した初めての機会。刷り上がりをお持ちするのが楽しみです (飯田)